汎用電線基本に機能製品へシフト

古河電工産業電線

新製品開発し比率アップ目指す

古河電工産業電線（＝FEIC、本社・東京都荒川区東日暮里）は、古河電工グループの汎用電線メーカーだが、最近は機能製品の開発、拡販にも力を入れている。機能製品の堅調で16年度営業利益は過去最高を更新し、17年度は8％の増収を見込んでいる。汎用電線メーカーや流通業の不振が続くなかで、業績好調を維持する同社の取り組み、今後の計画などを松本康一郎社長に聞いてみた。

当社の16年度売上高は、当初計画では前年度比7％増の327億円としていたが、結果は290億円で前年度を5％下回った。減収は汎用電線の需要が期待していたほど伸びず、銅価急落の影響も大きい。内訳では汎用電線が銅量で3％減、売上高は銅価安値で13％減だった。機能製品は銅量で7％、売上高は4％前年度を上回った。汎用電線の落ち込みを機能製品の伸びでカバーし、合計で5％減にとどまった。

営業利益は15年度に最近8年間での過去最高だったが、16年度は機能製品の堅調に加え、平塚、九州工場の生産効率化が進んだことや、あらゆる面での経費削減効果で約4倍増となり過去最高を更新した。

17年度売上高は、16年度を8％上回り315億円を計画している。増収は機能製品が好調を持続し、汎用電線も需要回復が予想され、銅価も前年度に比べ高値安定で推移していることによる。出荷銅量は前年度比5％増の約2万8千㌧の見込みだ。

古河電工産業電線社長
松本　康一郎氏

営業利益は16年度が大幅増だったので、17年度は慎重な見方でほぼ横ばいとしている。しかし、これはあくまで最低限度の目標であり、付加価値の高い機能製品の拡販で増益を目指す。

当社は古河電工の汎用電線製造を担っており、汎用電線の安定供給と安定収益確保が基本といえる。機能製品開発でも、汎用電線で長い間に培われた当社独自の技術やノウハウは生かされており、既存技術の改良、改善はこれからも続ける。

ただ、汎用電線の売上高は銅価に左右される面が強く、採算的に厳しいのは事実だ。このため、15年6月の社長就任以来、汎用電線の売上高を減らさず、付加価値の高い機能製品の売上高を伸ばす方針を打ち出し、実施してきた。新製品を毎年度上市する計画をたて、これを実施し、実現している。機能製品へのシフトは今後さらに加速する。